



毛利元就没後 450 年記念



シンポジウム 博物館公開講座第5回

毛利元就

令和3年11月20日(土)

会場：安芸高田市民文化センター(クリスタルアージュ)大ホール
主催：安芸高田市歴史民俗博物館 安芸高田市教育委員会



毛利元就像(部分) / 毛利博物館蔵

没後四五〇年、史料から語る
毛利元就の横顔

■パネリスト紹介

和田 秀作 氏 (山口県文書館専門研究員)
山口県生まれ。専門は日本中世史、特に戦国大名大内氏の研究。論文「大内氏の領国支配組織と人材登用」『室町戦国日本の覇者大内氏の世界をさぐる』(勉誠出版)など。

柴原 直樹 氏 (毛利博物館館長)
福山市生まれ。専門は日本中世史、特に戦国大名毛利氏と備後国人領主の研究。著書に『元就の手紙』(毛利博物館)など。

秋山 伸隆 氏 (県立広島大学名誉教授)
鳥取県生まれ。専門は日本中世史、特に戦国大名毛利氏の研究。著書に『戦国大名毛利氏の研究』(吉川弘文館)など。当館特別展「毛利元就」監修

木村 信幸 氏 (広島県立歴史博物館学芸課長)
広島市生まれ。専門は日本中世史、特に安芸吉川氏の研究。論文「戦国後期における吉川氏の権力構成-親類衆・奉行人を中心にして-」『吉川広家』(戎光祥)など。

司会進行：秋本 哲治 (安芸高田市教育委員会)

■日 程

- 12:00 開 場
- 13:00 開 会
- 13:10 第1部 プレゼンテーション(各 15 分程度)
 - ①「大内氏からみた毛利元就の人物像について」
山口県文書館専門研究員 和田秀作氏
 - ②「国衆から見た元就」
毛利博物館館長 柴原直樹氏
 - ③「隆元から見た元就」
県立広島大学名誉教授 秋山伸隆氏
 - ④「次男元春から見た父毛利元就」
広島県立歴史博物館学芸課長 木村信幸氏
- 14:20 休憩
- 14:30 第2部 パネルディスカッション
- 16:00 閉会
※時間は目安です

毛利元就関係略年表

和暦年(西暦)	年齢(数え歳)	章	毛利家当主	出来事		
明応6年(1497)	1	第1章	弘元	毛利弘元の次男として誕生。幼名松寿丸		
明応9年(1500)	4			兄幸千代丸(興元、8歳)家督相続。松寿丸、父と多治比猿掛城に移る		
文亀元年(1501)	5			母福原氏死去(34歳)		
永正3年(1506)	10		興元(10年)	父弘元死去(39歳)		
永正8年(1511)	15			元服し、「元就」と名乗る		
永正13年(1516)	20		幸松丸(7年)	興元死去(24歳)。その長男幸松丸(2歳)家督を継ぎ、元就が後見		
永正14年(1517)	21			初陣(有田合戦)に勝利し、安芸守護武田元繁を討ち取る		
大永3年(1523)	27	第2章	元就(23年)	尼子方として、鏡山城を攻める。その後、幸松丸死去(9歳)。元就家督を相続し、郡山入城。長男隆元誕生		
大永4年(1524)	28			謀反の動きが発覚し、弟元綱一派を粛清		
大永5年(1525)	29			毛利氏、再び大内方となる		
享祿3年(1530)	34			この頃、芸石有力国人高橋氏を滅ぼす。次男元春誕生		
天文2年(1533)	37			三男隆景(徳寿丸)誕生		
天文3年(1534)	38			この頃、宍戸隆家と元就次女との縁談がまとまる		
天文6年(1537)	41			長男隆元を山口の大内氏へ人質に出す		
天文9年(1540)	44			9月 尼子詮久、吉田侵攻(郡山合戦) 翌年1月 尼子軍出雲へ撤退		
天文11年(1542)	46			大内氏の尼子攻めのため出雲に従軍するも、翌年敗退		
天文13年(1544)	48			三男隆景(12歳)、竹原小早川家を相続		
天文14年(1545)	49			正室妙玖死去(47歳)		
天文15年(1546)	50			この頃、隆元(24歳)に家督を譲与		
天文16年(1547)	51			第3章	隆元(17年)	次男元春(18歳)、吉川家を相続
天文19年(1550)	54					吉川興経を殺害。井上一族30余名を粛清。「五人奉行」の成立
天文20年(1551)	55					陶氏の大内氏への反乱に協力し、安芸の大内方諸城を攻略
天文22年(1553)	57					幸鶴丸(輝元)、隆元の長男として誕生。陶氏と決別(防芸引分)
弘治元年(1555)	59					(厳島合戦)に勝利し、陶晴賢自刃(35歳)
弘治3年(1557)	61	大内氏を滅ぼし周防長門を平定。「傘連判状」に署名、「三子教訓状」を認める				
永祿4年(1561)	65	3月 隆景に招かれ隆元と新高山城に逗留				
永祿5年(1562)	66	石見を平定(石見銀山を掌握)し、出雲へ出陣				
永祿6年(1563)	67	毛利氏と大友氏が講和合意 隆元の急死(41歳)により、輝元家督相続(11歳)。元就が後見				
永祿9年(1566)	70	第4章	輝元			出雲尼子氏降伏、毛利氏中国制圧
永祿11年(1568)	72			河野氏救援のため元春・隆景、伊予に出兵。 大友氏との講和破れ毛利軍北九州侵攻、「御四人」体制が始まる		
永祿12年(1569)	73			九州攻めの支援のため長府へ出陣。元春、山口の大内輝弘の反乱を鎮圧		
元亀元年(1570)	74			輝元、出雲の尼子方の反乱を鎮圧。		
元亀2年(1571)	75			郡山城にて死去(75歳)		
天正元年(1573)		終章		輝元、菩提寺洞春寺建立		
天正10年(1582)				本能寺の変、その直後織田軍と停戦		
天正19年(1591)				輝元、広島城を築城		
慶長5年(1600)				関ヶ原合戦により、毛利氏防長へ転封		
平成9年(1997)				生誕500年、NHK大河ドラマ「毛利元就」放映		
令和3年(2021)			没後450年、特別展「毛利元就」開催			

〈安芸高田市歴史民俗博物館からのお知らせ〉

★本日は午後5時30分まで開館！
シンポジウム開催につき特別に延長します

★特別展「毛利元就」開催中！

- 毛利元就像(重要文化財/毛利博物館)の実物展示は明日まで
- 毛利元就書状(現存元就最後の手紙/山口県文書館)の実物展示は明日まで

★特別展「毛利元就」図録は当館のみで発売中！(税込1,000円)

★公開講座第6回 受講受付中(要申込)

12月5日(日)午後13:30~15:30(予定)於:市民文化センター小ホール

「戦国期毛利氏の肖像画 ~毛利元就像をめぐって~」

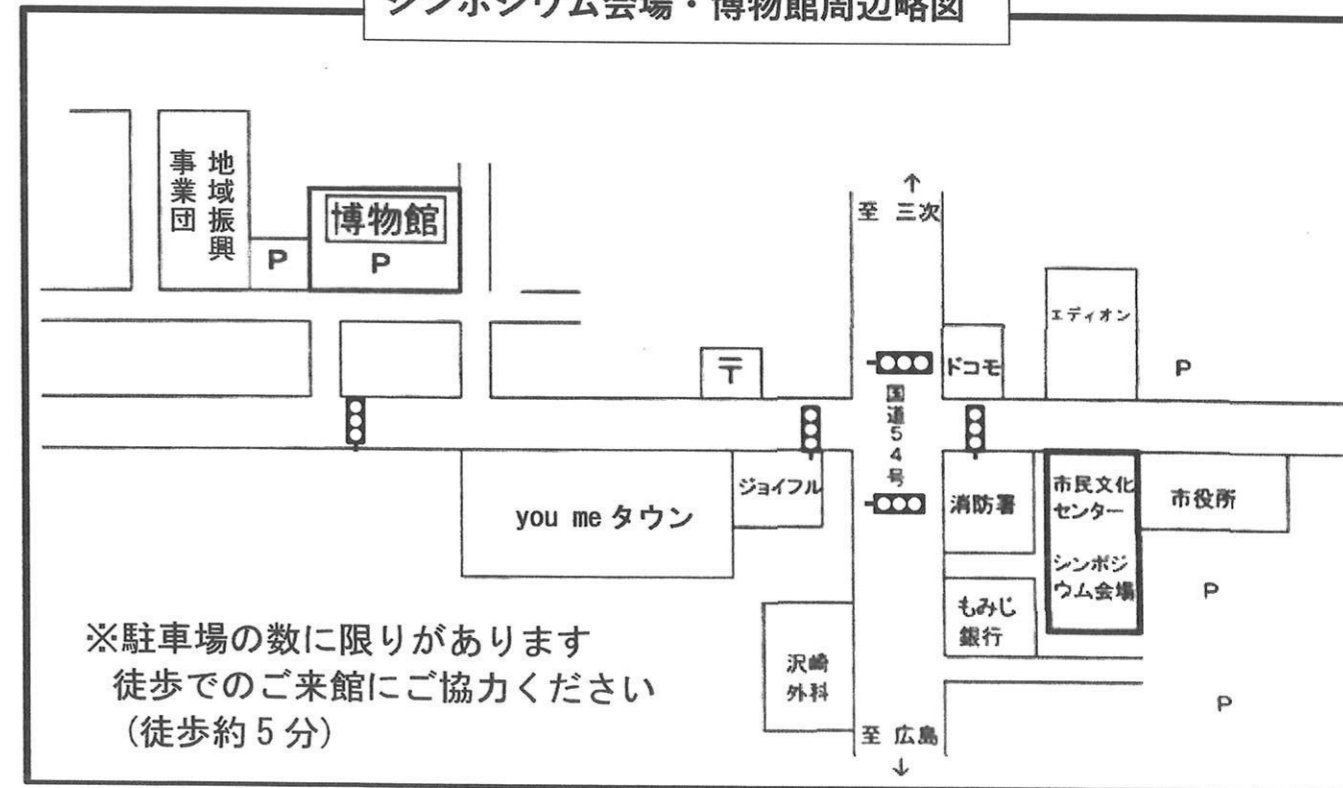
広島市立大学准教授 城市 真理子氏

※問い合わせ・受講申込は博物館ホームページまたは電話にて

★郡山城デジタルガイドマップ誕生！

12月1日よりタブレットの貸出開始(有料)。郡山登城のお供に

シンポジウム会場・博物館周辺略図



※駐車場の数に限りがあります
徒歩でのご来館にご協力ください
(徒歩約5分)

大内氏からみた毛利元就の人物像について

山口県文書館専門研究員 和田秀作

はじめに

- 大内氏側の同時代史料には、元就の人物像について直接言及したものはない。
- 天文 23 年(1554)5月、陶晴賢は毛利氏と小早川氏の行動を「悪逆の企て」、「猛悪無道」[岡 145 久芳]と非難。*この時点での見方 ⇒ たぶんに相対的なもの

1 大内氏と毛利元就の基本的な関係

- 大永 3~5 年(1523~25)頃と天文 23 年(1554)5 月以降を除くとおおむね良好。
- 大内氏は、元就を安芸国人領主連合の要と認識し、「軍勢催促権」(軍忠の吹挙権と褒賞の伝達権)を与えて、元就を通じて安芸国衆の掌握を意図。

2 大内氏当主からみると…

- 義興(元就より 20 歳年上)
 - ・永正 14 年(1517)武田元繁を討ち取った元就に対し、「多治比(元就)の事、神妙の由凌雲院殿(大内義興)仰せ出だされ、御褒美斜めならず」[毛利 251](* なかなか役に立つやつ)
- 義隆(元就より 10 歳年下)
 - ・天文 12 年(1543)出雲で大敗して帰国する途上、元就从無事帰国した報告を受け、「喜悦」、「安堵」し、路次での奮戦のおかげで大内勢が撤退できたと感謝[大内氏実録引用書所収文書](* 頼りになるやつ)
 - ・天文 18 年(1549)山口に下向・滞在した元就親子を歓待し、複数回饗応。帰国前日の 5 月 17 日、元就の宿を訪れ、別れの挨拶。さらに自筆書状で「終身隔心を存ずべからず」、「万般憑み入り存」[山口県立博物館所蔵文書]と伝える(* 心底頼りに思うぞ! ⇒ 最大級の評価)
 - ・天文 11・12 年(1543・44)頃、隆景の竹原小早川家相続に際し、躊躇する元就に「斟酌」には及ばない[毛利 217]、竹原の家臣が強く望んでいるのだから[同 218]と説得(* 慎重な男だ)
- 義長(元就より 35・6 歳ぐらい年下)
 - ・天文 23 年(1554)5 月、自分と陶晴賢の仲を裂こうと画策した元就のために、「敵調略」のゆえ「疑心あるべからず」と晴賢へ誓約する羽目に[山内 217](* 嫌な男だ)

3 陶氏からみると…

- 興房(元就より 15~19 歳年上)
 - ・大永 5 年(1525)、元就が尼子氏から離反した結果、「芸州之者共」が大内方として奔走したのは「元就一身之忠儀」と評価[毛利 251](* 使えるやつ)

- ・享祿 3 年(1530)志道広良と「世上」について情報交換した際、「礼部(元就)は何と何と仰され候や」[岡 16 志道]と元就の考えを気にする(* 能力を評価)

- 晴賢(隆房、元就より ²⁴27 歳年下)
 - ・天文 20 年(1551)豊後大友氏は元就に返書を送り、陶氏の挙兵が成功したことを「陶隆房御入魂の首尾をもって」[長府桂]と表現。(* 頼りになる同盟者)
 - * 入魂:あることがらについて了解を求めるため、前もって申し入れ、親しく話をする。
 - * 首尾:物事の初めと終わり。終始。物事の経過や結果。てんまつ。
 - ・天文 23 年(1554)正月、出兵を督促している際中に、義長の大内家継承の際は「晴賢同前」に忠心に励んだ、義長からの「御書」は家宝にすると、元就从返事[三卿伝史料所収文書](* 食えない男だ)

4 弘中隆兼からみると…

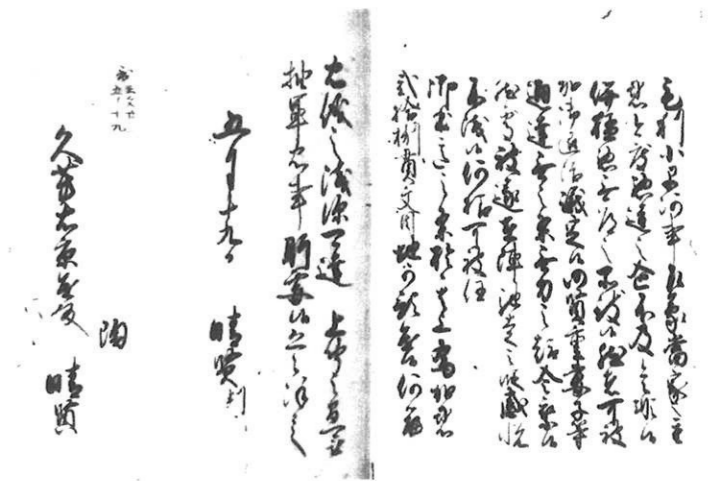
- 天文 3 年(1534)元就到九州の状況について意見を求める[毛利 280]。(* 能力を買う)
- 元就は、元春夫人の手紙が「三くたりはかり」でそっけない様子を「弘中三河守(隆兼)か状」にたとえる[毛利 545]。(* 距離感、警戒感)

おわりに

- 大内氏側の人間は、元就を「慎重で用心深い」、「味方にすれば頼もしく、敵に回すと嫌な男」とみていたのではないかな。



大内義隆肖像 (山口県文書館蔵)



陶晴賢書状写 (山口県文書館蔵)

安芸高田市歴史民俗博物館 令和三年第五回公開講座
 没後四五〇年記念事業 シンポジウム「毛利元就」
 二〇二二年十一月二〇日(土)
 於 安芸高田市民文化センター
 クリスタルアージヨ
 (二階 大ホール)
国衆から見た元就
 毛利博物館 柴原 直樹

はじめに 国衆とは

- ・国衆「当国衆」「備後衆」などと表記
- ・明確な規定はないが、国人領主のうち「有力」なもの
- ・「有力」は規模とは限らない(格式・伝統や立地などが加味)
- ・毛利氏はもともと安芸国衆の一人
- 元就代に「すべりぬけ」で第一人者に
- 大内氏からの自立により「戦国大名」に
- 大内氏・尼子氏の討滅により立場を強める
- 元就死後、秀吉政権への従属により国衆統制を強化

一 元就は国衆をどう見ていたか？

二 国衆は元就をどう見ていたか？

③文禄二年(一五九三)四月二十八日熊谷信直書状(元直宛)
 【熊谷「一七二」】

一 对御当家、馳走可被仕候、其子細者、元就様、隆元様、別而請御恩候儀不浅、輝元様其段しろしめされ、被加御懇意候段者、今生後生二至る迄、不相忘異事、於信直御奉公をも仕、先年大内殿陶御当家御引分之時、互申替候事共候、其後、嚴島御渡海之時、隆景様御供候て、罷渡候時、又本庄御討果之時、又立花御陣之時、於長府元就様申上候儀、元春、隆景御存候へ共、於于今者、隆景御一人、定而可為御存候、折節者、又可被思食出事も可有之候、信直是ほと無二馳走仕たる筋目候、輝元様迄御三代、我等も三代、如此候上ハ、元直右之忠節を不忘、御当家被及御無力候共、其御届之事、不忠不仕様二、無二之覚悟、於信直、千方々とふらひよりも可為本望事、

- ・死に臨んだ熊谷信直が孫元直に毛利家への忠節求める
- ・元就・隆元・輝元の恩と信直の忠節
- ・熊谷信直の奉公
- 陶氏との対決、嚴島への渡海、本庄常光討滅、立花城攻防戦、長府での元就の言葉
- ・忠節と奉公の連続 孫の元直にも奉公を求める

①弘治三年(一五五七)四月一日毛利元就書状写

【閩閩録「八四」児玉「10」】

(前略) 備後衆など八遠国候とて、兵糧一向候へて、むりに上り候はんなどの体候間、彼是愛許内儀之心遣、更以不能申候、(後略)

・長門且山城攻略時の元就書状

・戦況を大局的に見ない備後衆に対する不満

②永禄十二年(一五六九)卯月十六日毛利元就自筆書状

【毛利「五四九」】

御状拝見申候、我等事数年備芸石国衆申合、すいぢく仕候、不思儀之弓箭出来候而、国衆老若被罷出、氣遣仕候、然処、元就所勞之儀とハ乍申、此時不罷出候事、儀理をもかき候事、あまり二口惜候条、関府まで罷出、程近く談合成とも仕候ハて不叶儀候間、此分存立候、(後略)

- ・豊後大友氏のと戦いにあたり元就が孫輝元に与えた書状
- ・数年同盟し、随逐してくれた備芸石国衆が九州へ出陣
- ・元就が病を理由に出兵しないのは「儀理」を欠く

・毛利氏と盟約を交わした国衆は毛利氏に随逐
 ・元就としても彼らに対する「儀理」は欠かせない
 ☆双務契約的な同盟を維持(元就も一方的に破棄せず)

④天文二十年(一五五二)十月七日平賀弘保外二名連署起請文(毛利元就・隆元宛)
 【毛利「二二〇」】

今度悴家之儀、元就隆元以御入魂、預御再興候次第、於吾等今忝存知候、此御恩賞之儀、努々不可致忘却候、(後略)

- ・大内義隆によって替えられていた家督を元就の力で奪回
- ・「再興」「恩賞」と評価、以後毛利氏との間に盟約

⑤享禄四年(一五三二)二月十二日毛利元就起請文写(出羽祐盛宛)
 【閩閩録「四三」出羽「1」】

出羽七百貫御本地之内四百五拾貫、高橋譜代押掠候、今度防州御判申成、以其上本城要害之事、当家以武略仕捕之、令一円進置候之処、自今以後当家為与力可有御馳走由、嚴密之以起請文示給候、祝着之至候、(後略)

- ・高橋氏に押領されていた出羽本領を奪回し、大内氏の許可を得て出羽氏に返還
- ・出羽氏は元就に対して「与力」として奉公誓う

・元就は国衆家の存続に尽力
 ・国衆からの馳走に元就も応える「覚」の確立

隆元から見た元就

秋山 伸隆

(史料の引用は書き下し文とし、漢字の一部や変体仮名を通常の仮名に改め、濁点を付した)

はじめに

- ・「悴家(かせいえ)の事、我等五十年および主人に罷(まか)り成り、かくの如く相かかわ(拘)り候」(毛利640:展示42)＝わが毛利家は、私が50年に及び主人となって維持してきた。
27歳 大永3年(1523) 家督相続 (家督:23年間)
50歳 天文15年(1546) 隆元(24) 家督相続。元就は「大殿」「上様」と呼ばれる
61歳 弘治3年(1557) 政務から引退を申し出る。隆元(35) 反対する
67歳 永禄6年(1563) 8月4日、隆元(41) 急死 (隆元を後見:17年間)
68歳 永禄7年(1564) 輝元(12) 元服
70歳 永禄9年(1566) 9月 元就・輝元(14) 連署状の発給始まる
75歳 元亀2年(1571) 没 (輝元を後見:8年間)
- ・元就が家督の地位にあったのは23年間、その後は25年間、隆元と輝元を後見した。毛利家が戦国大名として発展した時期の家督は隆元・輝元であり、元就は後見という立場であった。元就が後見という立場で指導力を発揮できたのは、後継者が隆元であったから。

1 元就と隆元

- ・隆元は大永3年(1523)誕生、天文6年(1537)12月から人質として山口滞在、天文10年(1541)夏、安芸に帰国。
- ・天文12年(1543)からは元就(日下:につか=日付の下)・隆元連署状の発給が始まり、家督相続後の天文16年(1547)から隆元(日下)・元就連署状に転換する。
- ・天文19年(1550)家臣連署起請文(毛利401)によれば、「御傍輩中喧嘩」は「殿様(隆元)御下知・御裁判」とされ、家中統制権は隆元にあった。一方、「上様(元就)より弓矢に付きて条々」、「御褒美あるべき所を、上様に御感なきにおいては、年寄中として申し上げらるべく候」とされ、軍事指揮・論功行賞権は元就が保持していた。
- ・元就は、「談合」や「余所(よそ)への使者」「余所への状」は隆元が命令せよと、家督の隆元を前面に押し出そうとする一方で、「元就助言」を得よ、「先内談」せよと指示している(毛利412)。「我々に密蜜々にて尋ぬべき事肝要に候」として、「使」「状」による事前協議、又は「面談」を求めている(毛利415)。
- ・元就は、隆元の元就宛書状案(下書き)を受け取り、添削して返している(毛利417)。
- ・永禄6年(1563)2月、幸鶴丸(輝元)と宍戸隆家娘との婚約に関する隆元書状案も、元就が細かく添削している(毛利686)。差出人名の下の墨の跡は、隆元の苛立ちを表しているか?

2 元就の危機感

- ・弘治3年(1557)大内氏を滅ぼし、安芸・備後・周防・長門・石見(一部)を支配する戦国大名となる。「弓矢にハ勝候」→「諸人の心底も替り候」「上つらばかりの慰懃」「あきない」、「操手(あやつりて)」の不足、「政道法度」の遅滞、軍勢狼藉の横行など(毛利418・420など)
- ・五人奉行制(隆元奉行=赤川元保・国司元相・粟屋元親、元就奉行=児玉就忠・桂元忠)

- ・元就の意向を意思決定や政務執行に反映するための元就奉行が、隆元奉行によって排除される事態も(元就奉行の花押がない五人奉行連署状)。隆元奉行(とくに赤川元保)に対する元就の不信。

3 隆元から見た元就

- ・隆元は父を「名将」と呼び、「名将の子には必ず不運の者が生れ候」、それが自分だとする(毛利762)。
- ・弘治3年(1557)元就が引退を断念し後見を続けることに、隆元は「誠に千万の安堵、この事に存じ候」(毛利407)と安堵する。
- ・永禄5年12月21日、隆元は厳島大明神に父元就の身軀堅固・寿命延長を祈願し、もし父に難あるときは、その難を自分が引き受けると祈願する(毛利759)

4 元就から見た隆元

- ・「山口かかり」(毛利587)、「ほんしきだて」(本式立)、「分別ちとちと薄く候か」、「武略計略調略」の「無稽古」「無数寄」、ただし「孝行」「仏神などへの事」は見事(毛利413)、「あまり御ためらいふか(深)く候」「国を治は賞罰の二つならではにて候」(毛利420)
- ・隆元と元春・隆景との関係は、元就が引退することによって、元春・隆景の隆元に対する態度が変わるのではないかと期待している(毛利539)兄弟三人、宍戸隆家の協力(毛利418)→三子教訓状
- ・天文22年末から23年初めにかけて、元就は陶の参陣要請を受けて石見下向を決意していた。→隆元は陶による元就の抑留・謀殺を恐れて元就の下向に断固反対する。隆元が元就に異を唱えるのは珍しい。元就への絶対的な信頼＝見方を替えれば元就への依存
- ・元就は自分の石見下向の際には親類衆の同行は無用だとしている(毛利663)。もし自分に万一のことがあれば隆元に毛利家を託したいというのが、元就の真意ではないか。
- ・「隆元候つる時は、世上のおそれもすくなく候て罷り居り候つる」(毛利548)→元就は後継者としての隆元に期待していた。

5 隆元没後の元就

- ・隆元を喪った元就の落胆ぶりを伝える隆景書状には「この上は一身の事、ともかくも相果て候てこそ道道の本望と申され候て、何篇当時はうちふてたるあてかい思案まで候」、尼子氏を降して安芸に帰陣できたら「出家法師にも身をなし、何方之すまいあるべきの条」、「元春隆景進退等、更に存ずまじく候」とある(長府毛利文書)。隆景は、元就が70歳を過ぎてても在陣を遂げたのは「隆元御ためを存ぜられ候ての儀にてこそ候つれ」としている。
- ・尼子氏を降して永禄10年(1567)出雲から吉田に戻った元就は、「年至極候」「病気の事候」と引退の希望を輝元に伝えた。
- ・輝元は「まったく思いのほかの考えで、情けない。隆元は40歳まで元就にすべて任せていたのに、ようやく15歳になったばかりの私を見捨てて引退するのか。佐東でも多治比でも元就のいるところに私も付いていく。情けなく、口惜しい」と、苦々しげに語ったという(毛利640)。
- ・引退を強行すれば、元就と輝元は「義絶」となり、隆元に「届」もできなくなると、元就は引退を断念する。→すべては隆元への「届」のため。
- ・現在確認できる元就生涯最後の文書は、元亀2年(1571)6月4日 元就・輝元連署寄進状(寺社証文・常栄寺)。隆元追善のため佐々部村持丸名7町2段半を寄進する。
- ・正文が現存するのは同じ日の元就書状。隆景宛(常栄寺文書:展示44)。元就自筆?

令和3年11月20日(土) @ 安芸高田市クリスタルアーシヨ

「次男元春から見た父毛利元就」

ふくやま童戸千軒ミュージアム(広島県立歴史博物館) 木村 信幸

資料1 吉川家文書

四〇九 毛利隆元加冠状

(押紙) 従是契約状

加冠 元

天文十二年八月晦日

(毛利) 隆元(花押)

1543

(毛利元就) 少輔次郎殿

- ◇ 元春、兄毛利隆元を烏帽子親として元服
- ↓ 元春 隆元の家臣としてのスタート

資料2の1 吉川家文書

四一六 北就勝契状

(押紙) 従是養子契約状

我等事、實子不所持候之間、少知行之事、一期之後者、可讓進候、然上者、何事、悉皆御扶持頼存候、可爲此契状之辻候、仍爲後日一筆如件、

1544

(元春) 少輔次郎殿

式部少輔(志) 就勝(花押)

資料2の2 吉川家文書

四一七 毛利元春自筆契状案

如唯今於無御實子者、御知行之儀對我等可讓給之由本望候、如此申合候、上者悉皆共可致奉公候、萬一於御實子出來者、則彼御方へ渡可申候、于時、毫角不可申候、仍契状如件、

1544

(天文十三年) 十一月廿日 (北就勝) 式部少輔殿

少輔(志) 元春

- ◇ 北就勝(元就異母弟)、元春に対し、「少知行」を死後に譲るから、何事も悉皆「御扶持」(支援)を頼むと「契状」を提出
- ◇ 元春、北就勝に対し、「御知行」の譲与を感謝し、「申合」わせた上は悉皆「奉公」(支援)することを誓う「契状」を提出

- ↓ 就勝の死後に元春が知行を相続/相互扶助の契約 || 養子縁組
- ★ 元春は、旧高橋一族の北氏を相続する。

- ↓ 高橋氏は、大内氏陣営における国衆連合の盟主
- ↓ 北氏は、高橋氏の機能の一翼を担っていた。
- ↓ 元春は、大内方の国衆とのネットワーク・情報を継承

資料3 吉川家文書

四三〇 大内義隆後討状

(毛利) 花押

吉川家督事少輔次郎元春可被存知之状如件、

天文十八年朔月廿一日

- ◇ 大内氏、元春を「吉川家督」を承認
- ※ 吉川氏の機能を継承
- ↓ 反大内氏方国人領主との関係・情報を有し、ネットワークを形成
- ※ 全ての領主層とのネットワークを獲得

資料4 『広島県史 古代中世資料編V』所収「贖録」(杉杜六郎広運)

三 吉川元春書状

1579

(志述) 元保 (吉川) 元長 まいる 申給へ

元春

當時之御弓箭行之儀付而、我等存寄之通、御兩所まで致内談候、御心中之段も無御用指不被相躰、被承候時儀之被仰様共ハ、依時々御事たるへく候、此御弓箭ハ如何ニ被思召候哉、三家之一大事に相極たる事ニ候、近年大内殿御家、尼子方之家如此成候儀、彼家々の時節とハ乍申、元就隆元其時代に御座有相、隆景我等式まで御手子を申、近年其覺不淺、被成御威勢、于今相續中儀茂、元就御才覺を以の御事に候、其段申も事新無其隱儀候、人の進退ハよき事はかり久敷儀茂無御座物ニ候条、此弓箭之御短束つねに各被思召候には一大事之儀たるへくと存迄候、なにはほとに各被(後略) (天正七年十一月二日)

- ◇ 「此御弓箭」は「三家之一大事」の極み。
- ◇ 滅亡した大内氏・尼子氏の「時節」とは言え、「元就・隆元」が「其時代」に居合わせ、「隆景我等」が「御手子」(下働き)した。
- ◇ 近年の毛利氏に対する世間の評判は高く、毛利氏の「御威勢」が現在も続いているのは「元就御才覺」の賜物である
- ※ 元春、父元就を高く評価

資料5 吉川家文書

一三三〇 吉川元春自筆書状

1579カ

経言(志) 申給へ

もと春

(中略) 如形のさすやうに御うまれに候て、趣を苦めされ候へ、せうしん事候、御をを候へ、元就の孫元春子と申候ても見くる、つらさる妹候、一兩年御きせやうも出来申候、さやうの事をも御心中ニハ、さやうもよく候具、爲親ニハ何さる身、さるし、又行を仕候へ、心さる物候、なき跡に御心持しそ不入候、今生ニ申御方我等問あし、御さやうの御隨候段、難謝可有迄候、能々其御分別可日出候、元棟先年日山、内々の行儀、事候つら、重器申候を候て、御(後略) (天正七年カ二月十八日)

- ◇ 元春、三男経言(後の広家)の行儀作法等について見直しを迫る。
- ↓ 経言が直したなら「元就の孫・元春子」として見苦しくない。
- ◇ 元棟も先年日山での内々の行儀が悪かったので、重ねて叱って直させた。
- ※ 元春、「元就の孫・元春の子」としてふさわしい行動をとるように語って子育てした。

